

岡 典明

幻想のファミリア - Le colline sono in fiore -

正直、私は無口で決して人付き合いの良い方ではない。むしろ苦手だ。

人の話を聞くのは楽しい。相手にもよるけれど…。

世の中には真逆の人間がいる。他者と積極的に関わり、見知らぬ者同士を引き合わせ、繋ぎ合わせる。

そんな芸当の出来る女性が大学院時代、留学生にいた。彼女は科や年代、性別、国といったあらゆる垣根を超え、ごく自然に人を魅了し、私と大勢の人々を繋いでくれた。彼女の作り上げた無限のファミリア。今でもそのファミリアは続き、さらに枝は伸びている。私と同じ 1964 年生まれ。ただ彼女は大人で、子どもで、母親で、光のようだった。

彼女のミドルネームは Hope。1 回だけ Hopeless だとジョークをいていたのを思い出す。彼女のように人を育て、愛することが私にもできるのだろうか。

2000 年、海の向こうで彼女は突然天に召された。飲酒運転の車に轢き逃げされ、即死だったと聞いている。

いまだに実感は無い。学生時代と同じように、気まぐれに、またふと目の前に現れる、そんな感覚。

あれから 16 年。彼女よりどんどん年を取る私は、恥ずかしくない人生を送っているのだろうか。

1996 年私は結婚した。

妻は子供服の仕事をしていた。私は渋谷にあった国立総合児童センターで、造形を専門とする部署の職員として働いた。

ふたりとも子どもに関わる仕事をしていたわけだが、私達夫婦に子どもはいなかった。

日々、不特定多数の他人の子ども、親子に関わり、見守る生活。それは無意識の子育て。

父は小学校の教諭をしていた。父もまた他人の子どもを育てていたことになる。

そのためか、近所の大人、教え子のお兄さん、お姉さんがあたり前のように小さな私の面倒を見てくれた。

他人による協同の子育ての記憶。

子どもに教わる日々。無意識の大人育て。

妻は良くしゃべる。気さくで、羨ましい性格だ。おかげで私は聞き上手に、いや、聞き流し上手になった。

生活はぎりぎり忙しい毎日だったが、互いに作家として制作し、発表を続けていた。

そんな彼女との結婚生活はおよそ 18 年で幕を閉じた。儚い夢のファミリアとして。

生活の中で制作をすることは、結局人と繋がり、他者と無縁ではない。それは子育て、他者との関わり、幻想のファミリアなのかもしれない。

悪さをしていたら、子どもでも大人でも大声で叱りつける、そんな偏屈で頑固な爺に私はなろう。

おか・のりあき

1964 年横浜生まれ。身の回りにある様々なものの形 や色、質感、匂いなどを再構成しながら、見えるもの と見えないもの、記憶の狭間、視ることの不確実性をテーマに制作。
2012 年「HAPPY TALK」プロジェクトを始動。現在は独身。